

仲間からの便り

2016年3月 No.21

2015年度もアジアの高校生が日本に、日本の中高生がアジアの国々に訪問しました。彼らは、慣れ親しんだそれまでの生活から離れ、さまざまな体験をしました。

今号の「仲間からの便り」では、プログラム毎に参加者のコメントを紹介します。



アジアの国々から日本へ



アジア・オセアニア高校生交換留学プログラム

一年間楽しかったです。私は多くの経験を得ました。来た時には誰も知らなくて、日本語も喋れなかったですけど、皆さん手伝ってくれましたので、なんでも簡単になりました。時々つらい時だったが、それで私は成長するようになりました。日本の食べ物は美味しいですから、太くなってしまいました。このプログラムをやっているの、他の国からの友達に会って、他の文化も知っているようになりました。今でもずっと日本の文化学びたいです。もっともっと友だちと遊びたいです。私は学校で知識と多くの友人を持って、私はそのために本当に満足しています。

シティ・ファティハ・サキナ(インドネシア)

ホストファミリーと友人たちが今までに私にして下さったことに感謝しています。彼らは私に沢山の楽しい思い出を与えてくれた上に、彼らも私に沢山の事を教えてくれた。日本にいる期間に、私は日本の文化と風俗がより良く分かるようになって日本の固定観念が変わっていったと思います。流暢ではないが、日本語がだんだん上達して行って、日本語で自分の意志を通じることができて、嬉しいです。(中略)他の人と互いに納得して、理解を深めて、いつか世界がより良い場所になるだろう。帰国後、他の人に外国へ訪れることや留学することを激励しようと思う。

タン・シャー・リン(マレーシア)

去年の夏休み、私は留学の最初の6ヶ月についてレポートを書きました。それらの間、私は私の経験がこれ以上よくなることができないと思いました。しかし、私はまちがっていました。その後の5ヶ月間は最初の6ヶ月よりもっとすばらしくて、よかった。(中略)フィリピン人はカトリックだからフィリピンのクリスマスはとても大きいお祝い。日本はクリスマスケーキを食べるしゅうかんがある。最初はさみしかったけど、ケーキを食べた、うれしくなった。(中略)ここでの経験はいっしょうわすれませんが、私のじんせいをかえたのでわすれることができません。

アンドリエン・アギラー・デスピ(フィリピン)

一番変わったと思うのは世界を広く見るようになったことだと思う。私は日本で留学する間、インターネットで偶然に韓国人の大学生が京都で韓国の伝統の服を着て道でフリーハグをする動画を見た。動画の最初は無視して通り過ぎる人が多かったが、だんだんハグしてくれる人も出てきた。その姿を見て私は韓国と日本は仲良くなれるだろうと思った。(中略)私も最初日本に来た時を思い出してみれば日本について先入観があって、心配もしたが、先に心の門を開けて相手に近づけていいたら国籍が違うことはどんな問題にもならないことを悟った。

イ・ジェハ(韓国)

学校が大好きなんです。友だちがおもしろくて、しゃべりも上手だから毎日ぜんぜんさびしくありません。(中略)部活の友だちたちから一つ学んだ。“どんなことがあっても最後までがんばって行こう！勝つか負けるかどうかはまだ分からないけど、とりあえずがんばろう！”これはバスケをするときだけでなく、いつでもがんばるという気持ちなんだ。この気持ちは日本人しか持っていない気持ちだ。今、意味分かった。なんで日本人がつらいこと我慢して、あきらめないで、前を目指す。これはみんながんばっているってことなんだ。

スラダー・セースン(タイ)



仲間からの便り

日本からアジアの国々へ

2015年度、日本からのかめのり奨学生は、中学生がタイ、高校生がカンボジア、マレーシア、韓国に滞在しました。ここでは、日本からのプログラム参加者の体験レポートを紹介いたします。

カンボジアスタディツアー (カンボジア)

このプログラムへの参加は、学校で行っている寺子屋運動で設立された寺子屋に見てみたいという思いからだった。寺子屋に通う現地高校生と交流し、カンボジアと日本の情報を共有することができ、勉強に対する意識を高めることができた。発展途上国と一言と言っても、とても発展している都市もあった。しかし、都市部と農村との間で格差が生まれているのも事実で、そんな環境でも前向きな発言を聞くことができ、とても勉強になった。これからも学校で寺子屋運動を続け、私の体験談を伝えながらより多くの人が参加してくれるように頑張りたい。

松井玲菜



短期派遣プログラム(韓国)

私は今回の留学で、たくさんの事を学びましたが、一番強く感じたのは人の優しさ・あたたかさでした。観光地や地元を案内してもらったり、クラスのみんが日本の事に対してすごく興味を持ってくれて、たどたどしい日本語でどれだけ日本が好きかというアピールをしてくれたりしました。私がこんなに楽しく1ヶ月を過ごすことができたのは、たくさんの方々の支えがあったからこそなのだと思います。この事は普段の生活ではあたりまえすぎて気づかないことだと思います。

佐野由依



中学生交流プログラム(タイ)

ブーケットの津波メモリアルパークは被災地学習としてたくさんのことを学ぶことができた。



そこではみんな「津波が起こる前」なんて波が引いたのかわからなかった」と同じことを言っていた。助かった人は、近所のおばあさんの津波が来るとい言葉があって逃げたらしい。しかし、大半の世代は、津波がなんなのかも知らなかったのだ。あらゆる人が津波の知識が少しでもあったら助かったかもしれない。やはり知らないということはとても怖いと思った。「津波でんでんこ」(津波の際、「自分の命は自分で守る」という教訓)は大切だと思った。

早川哲人

にほんご人フォーラム(マレーシア)

マレーシアでの10日間は私にアジアを見つめ直すきっかけを与えてくれた。日本での事前研修では日本語を勉強している外国人生徒を相手に日本の紹介をする想定でシミュレーションを行った。外国人生徒役の大人たちから「分からない」を連呼され、伝えられない事にショックを受けた。「いざ行けば大丈夫だ

ろう」その時は楽観的に考えていたが、実際に現地に行ってみると、ここまで日本語が難しい言語であったかと悩まされるほど、「伝える」という事の難しさを痛感した。国籍も文化も価値観も宗教も違う参加者との出会いは日本について考え、向き合わせてくれるものとなった。

山木光希

